『國民新報』1940年9月22日

[主張]　二三の提案

　ののためにはをうんとけなければならない。ののをして一、一またはのをけ三ケ月百五十のをやれば、一をらぬ子も日のとのがけ、三百のがえられ、そしてのやがまれるさうである。はににいて十ケみられてゐるののにてかなことださうだ。しかもそのは一一百でりる。のびにめたいものである。

　これもについてのことであるが、のとだけのとするところでは、々、へば一、のをきたいものである。ではがぎるれがあるから、五年なら五年[]といふにやればい。そして、といふにパートナーをつて、おにをしたり、また一でをいたりするのである。かくすることによつて、二の、をるとに、ではにをするをることがる。をねるにパートナー[]はしいになることだらう。

　七の、のは、にいてもしたいものである。りもも、ぱったりとまつたがい。はである。これはにあるものとふ。にのはしてゐるのに、でがやらぬといふのは、一にい。こんなことはややをしてをするやうに、一したらいにががることゝふ。

　になる、なるでありながら、みられないものがある。それはののなることだ。のなでは、やれだの、やれだの、やれだの、やれだのとにしいをつてゐる。それは二三ののとのためにされるなのだ。かゝるあるがために、のは一つかさないでゐる。ののためにも、かゝるはさるべきで、そのはなることにりけることがる。

　にりは一ケ月一しかつてないところもあり、にすれば『がない、をせ』ともほろゝのである。がなければ、あのとだけでもしてひたい。そしたらわれわれみるであらう。一月もそのまゝにしてくことがういふをくかは、ものことゝふ。